

米国議会図書館蔵『源氏物語』について：書誌と表記の特徴

著者	高田 智和, 斎藤 達哉
雑誌名	国立国語研究所論集
号	6
ページ	294-272
発行年	2013-11
URL	http://doi.org/10.15084/00000520

米国議会図書館蔵『源氏物語』について——書誌と表記の特徴——

高田 智和^a 斎藤 達哉^b

^a 国立国語研究所理論・構造研究系

^b 専修大学

要旨

二〇〇八年に米国議会図書館アジア部日本課の所蔵となった『源氏物語』写本 (UC Control No. 2008427768、全五十四巻揃) は、同館の所蔵となるまで学界未紹介の新出資料である。議会図書館本『源氏物語』の書誌と表記の特徴は以下のとおりである。

- 一、古筆別家第三代了仲の極書によると、伝承書写者は五辻諸仲（一四八七～一五四〇）である。
- 二、現在の表紙は後装のものであり、表紙付け替えは十七世紀末ころまでに行われたと推定される。
- 三、改装時の仮題僉が残存し、巻名に並びの巻が記されている。
- 四、一冊内での書写行数が一定しない巻が十八巻に及ぶが、左右見開き二丁では、半丁内での書写行数は一定している。
- 五、特殊表記和歌が六十二首ある。
- 六、本文書写のハの仮名・シの仮名に、字母レベルで使用の傾向差が認められる。
- 七、書人は疎らである。

キーワード：源氏物語、米国議会図書館、写本、書誌、異体仮名

一 はじめに

米国議会図書館アジア部日本課 (Library of Congress, Japanese Rare Book Collection) が所蔵する『源氏物語』写本 (UC Control No. 2008427768、以下「議会図書館本」) は、二〇〇八年に米国議会図書館の所蔵となるまで知られていなかった学界未紹介の新出資料である。桐壺から夢浮橋まで全五十四巻揃（五十四冊）の完本である。

議会図書館本は、割注のような二行書を交えた特殊表記和歌や、

一冊内での書写行数が一定しないなど、他の『源氏物語』写本には見られない表記上の特徴を持つ。残存する改装時の仮題僉には並びの巻が記され、『源氏物語』の巻名を考察する材料となる。また、議会図書館本は、嫁入本や高度学習本ではなく、『源氏物語』享受の違う側面を考える上で、興味深い資料ともなり得るものである。

また、米国議会図書館アジア部は、所蔵資料の公開に積極的である。二〇一二年には、議会図書館本のうち桐壺、須磨、柏木の

三巻の画像が、早くも米国議会図書館サイト (<http://lcweb4.loc.gov/service/asiaw/asiaw0001/2012/2012html/20122008427768000toc.html>) からインターネット公開され、閲覧・ダウンロードが可能となっている。

本稿は、筆者らがこれまでに行った四回の原本調査（一回目：二〇一〇年一月二五日～二七日、二回目：二〇一一年一月二四日～二五日、三回目：二〇一二年二月一日～三日、四回目：二〇一二年八月二七日～二九日）に基づいて、主として米国議会図書館本の書誌と表記の特徴を述べるものである。

二 折紙と伝承書写者

議会図書館本には、古筆別家第三代の了仲（二六五六～一七三六）による正徳元年（一七二一年）の折紙が添えられている（図1）。極書の全文は次のとおりである。

源氏物語四半本 全

五辻殿諸仲卿真筆

外題三条西殿実隆公

御一筆無疑者也

正徳元年五月下旬 古筆了仲「釣玄斎」印（陽刻）

これによると、議会図書館本の書写者は五辻諸仲（一四八七～一五四〇）、外題は三条西実隆（一四五五～一五三七）の手になるものとされる。米国議会図書館の蔵書目録では、書写年代を三条西

実隆没年の一五三七年以前と比定している。

『尊卑分脈』などによれば、五辻諸仲は、宇多源氏の流れをくむ五辻家に生まれ、晩年の天文七年（一五三八年）に従三位に叙せられ、五辻家を堂上家に加えた人物である。神田久義（二〇一一）では、『実隆公記』の記述から、五辻諸仲と三条西実隆との交流を明らかにし、五辻諸仲と三条西実隆の組合せが不自然ではないとするものの、伝五辻諸仲筆短冊と議会図書館本とは、筆跡の趣が異なると述べる。

さて、三代了仲の折紙はいくつかが知られている。専修大学図書館所蔵の『和漢朗詠集』写本（蜂須賀家旧蔵本、鎌倉時代書写）もその一つで、議会図書館本と同じく、三代了仲による正徳元年の極めを持つ。筆跡は議会図書館本の折紙のものと同じで、議会図書館本の折紙は三代了仲の極めと断定し得る。しかし、議会図書館本の書写文字の状態や料紙を考慮すると、書写年代は一五三七年よりも下り、十六世紀から十七世紀にかけてとするのが妥当であると考えられ、三代了仲の極めが示す年代とずれるのである。



図2 塗箱

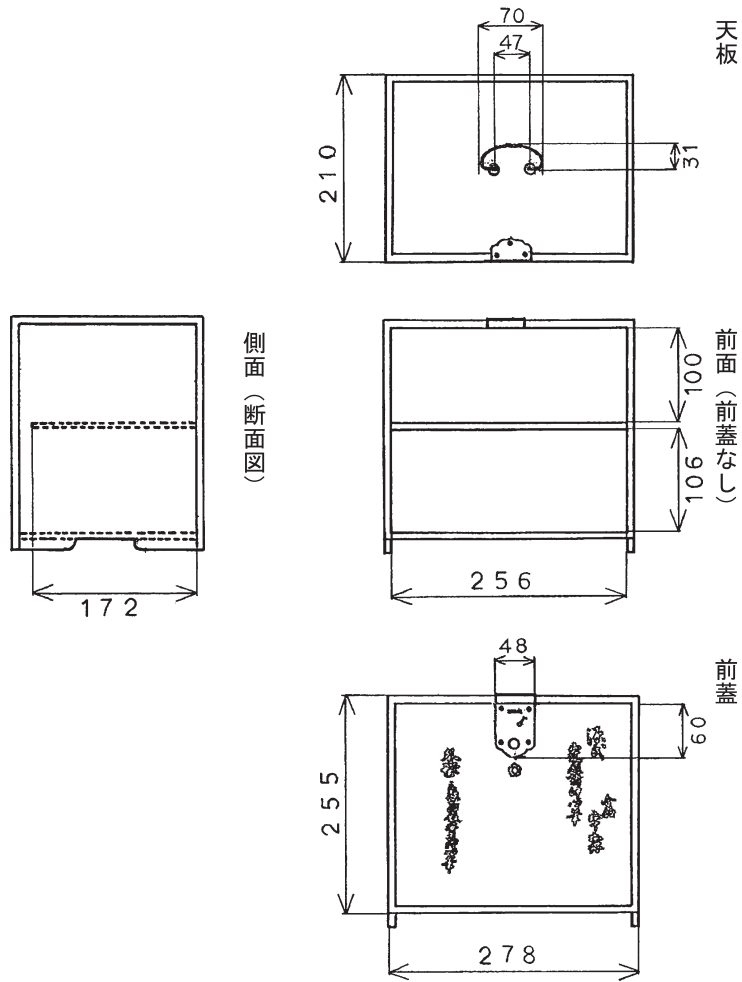


図3 塗箱の寸法 (単位はミリメートル)

三 装丁と改装

装丁は列帖装である。無地の濃青色表紙の中央に柿渋色の題僉を付す。料紙は鳥の子である。寸法は各巻によって違いがあるが、縦二五〇～二五二ミリメートル、横一六八～一七〇ミリメートルである。

表紙見返の右端には、全巻にわたって、糊の跡と剥がされた和紙の一部が残っていて、表紙の付け替えが過去に行われたことがわかる。また、表紙左端には、全巻にわたって押八双（左端から四ミリメートル付近に縦に上から下まで引かれた直線のへこみ）がある。和本の押八双は十七世紀末には見られなくなっていくとされるから（橋口侯之介（二〇〇五）、堀川貴司（二〇一〇）など）、現在の表紙は十七世紀末までのものとなるし、さらに、表紙付け替えの改装時期も十七世紀末までとするのが妥当である。

見返紙の裏上端中央（表紙と見返紙の間）には、全巻にわたって付箋が貼られ、巻名が記されている。表紙付け替え時の仮題僉であると考えられる。図4は夢浮橋の付箋である。「ゆめのうきはし」の「ゆ」の字画が一部欠けており、これは化粧裁によるものである。天地裁断が表紙付け替えと同時にあれば議会図書館本の改装は過去に一度、同時になければ二度の改装を経ていることになる。後述するように、貼紙を除いた跡も確認できることから、複数回の改装を想定しても矛盾はないように思われる。

内題、尾題はなく、巻名を記すのは外題と仮題僉のみである。巻名については後述する。

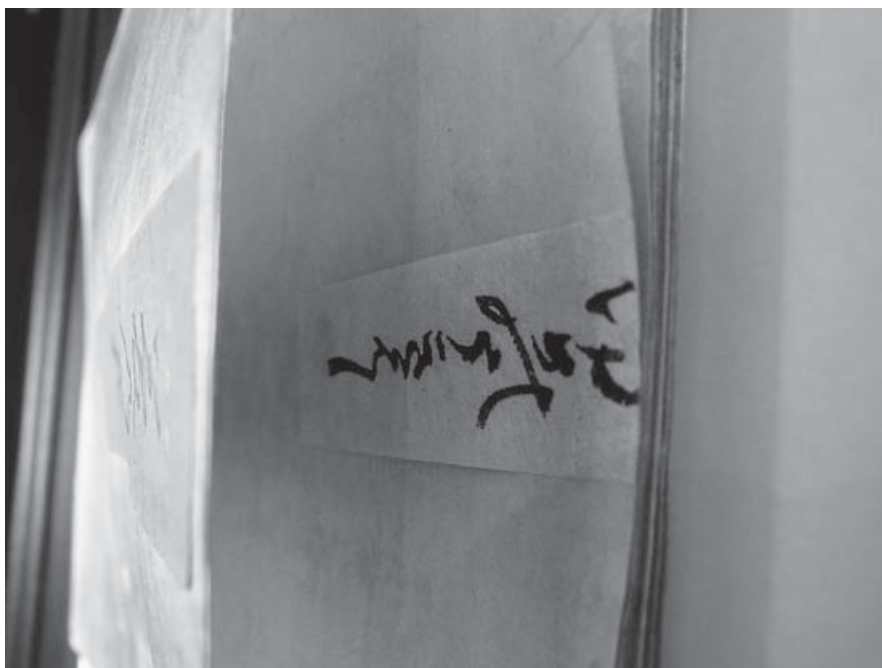


図4 夢浮橋の仮題僉

四 書写行数

表1に、各巻の寸法（縦×横・センチメートル）、墨付丁数、遊紙の丁数、括（折）の数、括内の丁数（見返、裏見返も一丁とした）、半丁の行数、本文の総行数、特殊表記和歌（後述）の数をまとめて示す。

議会図書館本は、半丁あたりの書写行数が一定していないという特徴がある（墨付最終丁を除く）。九行乃至十行が基本のようであるが、表1に示すように、行数が一定していない巻は、桐壺、帚木、玉鬘、蛸、常夏、篝火、若菜下、柏木、横笛、鈴虫、御法、幻、竹河、早蕨、東屋、蜻蛉、手習、夢浮橋の十八巻と、全体の三分の一に及ぶ。特に後半の巻に傾向が顕著である。

書写行数が一定しないと言っても、ランダムに行数が変わるわけではなく、行数の変わり方は大きく二種類に分けられる。

(一) 例外的に書写行数が異なる半丁がある巻

- 帚木 一丁裏のみ十行、十六丁裏のみ八行、ほかは九行
 玉鬘 二十四丁裏のみ十一行、ほかは十行
 常夏 十三丁裏のみ十一行、ほかは十行
 若菜下 一丁裏のみ八行、ほかは九行
 幻 十五丁裏のみ八行、ほかは十行

帚木、玉鬘、常夏、若菜下、幻の五巻では、書写行数が異なる半丁は一箇所乃至二箇所であるから、基本の書写行数は決まっています。例外的に基本の書写行数から外れる半丁があるとみて良いだろう。

(二) 途中から書写行数が変わる巻

- 桐壺 四丁表まで八行、四丁裏から九行
 蛸 十一丁裏まで十行、十二丁表から十三丁表まで十一行、十三丁裏から十行
 篝火 四丁表まで九行、四丁裏から八行
 柏木 十二丁裏まで十行、十三丁表から十六丁表まで十一行、十六丁裏から十行
 横笛 十丁裏まで十行、十二丁表から十二丁裏まで十二行、十二丁表のみ十一行、十二丁裏から十行
 鈴虫 九丁表まで十行、九丁裏から九行
 御法 十二丁表まで十行、十二丁裏から九行
 竹河 二十八丁表まで十行、二十八丁裏から九行
 早蕨 十一丁表まで十行、十一丁裏から九行
 東屋 六丁表まで十行、六丁裏から七丁表まで十一行、七丁裏から三十九丁表まで十行、三十九丁裏から九行
 蜻蛉 九丁表まで十行、九丁裏から十二丁表まで十一行、十一丁裏から十八丁表まで十行、十八丁裏から十九丁表まで十一行、十九丁裏から二十丁表まで十行、二十丁裏から二十一丁表まで十一行、二十一丁裏から二十二丁表まで十行、二十二丁裏から二十三丁表まで十一行、二十三丁裏から二十四丁表まで十行、二十四丁裏から二十六丁表まで十一行、二十六丁裏から十行、八丁裏まで九行、九丁表から二十四丁表まで十行、

表1 議会図書館本の書誌概要

巻名	寸法 (cm)	墨付丁数	遊紙丁数	括数	括内丁数	半丁行数	総行数	特殊表記和歌数
1 桐壺	25.0×17.0	25	前1	3	8,12,8	8,9	429	
2 帚木	25.2×17.0	41	前1	4	12,12,10,10	8,9,10	725	
3 空蟬	25.2×16.8	9	前1	2	6,6	9	147	
4 夕顔	25.2×16.8	37	前1	3	14,12,14	9	673	
5 若紫	25.2×16.8	29	後1	4	8,8,8,8	10	573	
6 末摘花	25.2×16.8	25	後1	3	12,8,8	9	441	
7 紅葉賀	25.2×17.0	19	後1	2	10,12	10	379	
8 花宴	25.2×17.0	8		2	6,4	10	152	
9 葵	25.2×17.0	32		3	12,10,12	10	635	
10 賢木	25.2×17.0	36		3	12,12,14	10	701	
11 花散里	25.2×16.9	4	前1,後1	2	4,4	10	66	
12 須磨	25.2×17.0	30		3	12,10,10	10	593	8
13 明石	25.2×16.9	28		3	10,10,10	10	558	8
14 潯標	25.2×17.0	24		3	8,10,8	10	472	8
15 蓬生	25.2×17.0	16		2	10,8	10	317	
16 関屋	25.2×16.9	6		2	4,4	9	99	
17 絵合	25.2×16.9	14		2	8,8	10	269	
18 松風	25.2×16.9	16		2	8,10	10	312	
19 薄雲	25.2×16.8	22		3	8,8,8	10	434	
20 朝顔	25.2×17.0	14		2	8,8	10	278	3
21 少女	25.2×16.9	38		4	10,10,10,10	10	748	
22 玉鬘	25.2×16.9	30		3	10,12,10	10,11	596	3
23 初音	25.2×17.0	10		2	6,6	10	196	
24 胡蝶	25.2×17.0	16		2	8,10	10	307	3
25 螢	25.2×16.9	14		2	8,8	10,11	281	5
26 常夏	25.2×16.8	16		2	10,8	10,11	308	
27 篝火	25.1×16.9	5	後1	2	4,4	8,9	83	
28 野分	25.1×16.9	14		2	8,8	10	269	3
29 行幸	25.1×16.9	20		3	8,6,8	10	392	1
30 藤袴	25.1×16.9	12		2	6,8	10	236	
31 真木柱	25.1×16.9	28		3	10,10,10	10	559	
32 梅枝	25.1×16.9	14		2	8,8	10	271	
33 藤裏葉	25.2×16.9	20		2	10,12	10	386	
34 若菜上	25.2×16.9	77	後1	4	20,20,20,20	9	1376	
35 若菜下	25.2×16.9	72		4	20,16,18,20	8,9	1282	
36 柏木	25.2×16.9	30		3	10,12,10	10,11	603	
37 横笛	25.1×16.9	12		2	6,8	10,11,12	244	
38 鈴虫	25.1×16.9	14		2	8,8	9,10	254	
39 夕霧	25.1×16.9	46		3	16,12,20	10	903	
40 御法	25.1×16.9	14		2	8,8	9,10	275	
41 幻	25.2×17.0	16		2	10,8	8,10	302	
42 匂宮	25.1×16.9	10		2	6,6	10	196	
43 紅梅	25.1×16.9	10		2	6,6	10	189	
44 竹河	25.2×16.9	32		4	8,10,8,8	9,10	623	6
45 橋姫	25.2×16.9	28		3	10,10,10	10	555	
46 椎本	25.2×16.9	28		4	10,6,6,8	10	553	4
47 総角	25.2×16.9	63	後1	3	18,24,24	9	1129	
48 早蕨	25.2×16.9	14		2	8,8	9,10	272	
49 宿木	25.2×16.8	60		4	16,16,16,14	9	1064	
50 東屋	25.2×16.8	42		4	10,12,12,10	9,10,11	833	
51 浮舟	25.2×16.8	44		4	10,12,12,12	10	874	8
52 蜻蛉	25.1×16.9	36		3	12,12,14	10,11	727	2
53 手習	25.2×16.9	42		4	14,10,10,10	9,10,11	814	
54 夢浮橋	25.2×16.9	12		2	8,6	9,10	229	

二十四丁裏のみ十一行、二十五丁表から十行
 夢浮橋 一丁表のみ九行、一丁裏から十一丁表まで十行、十一
 丁裏から十二丁表まで九行、十二丁裏から十行

書写行数の変え方にも、桐壺のように巻の途中で一回だけ変わる場合と、螢のように複数回変わる場合と二通りある。行数変更が一回だけの巻は、桐壺、篝火、鈴虫、御法、竹河、早蕨の六巻で、基本の書写行数を途中で変えたものと考えて差支えなからう。行数変更が複数回ある螢、柏木、横笛、東屋、蜻蛉、手習、夢浮橋の七巻も、基本の書写行数を複数回変えていると言っても良いかもしれないが、蜻蛉などは巻の途中で十回も変わるのであるから、基本の行数を定めて書写をしているとは考えにくい。

書写行数を変えるのは、残りの書写量を勘案しながら、行数調整を行ったためと考えられる。その巻の書写のために用意した紙数(括)に収まるように、あるいは、白丁を作らないように書写をした結果、巻内の半丁ごとの行数に変動が生じたのであろう。このような調整ができるのは列帖装だからである。列帖装は括を作り、それから書写をするとされている(橋口侯之介(二〇一一))。したがって、書写量を計算して、括に加える紙数によって第一段階の調整をし、書写時に行数を変えることで第二段階の調整をするものと考えられる。この第二段階の調整が顕著に表れているのが、螢、柏木、横笛、東屋、蜻蛉、手習、夢浮橋の七巻であろう。

議会図書館本の行数調整を詳しく調べてみると、半丁単位ではなく、右枚・左枚の見開き一丁単位で行数調整を行っていることに気

付く。同一巻内で半丁あたりの行数を十回変更する蜻蛉であつても、見開きでは右枚と左枚の行数は揃うのである。

		一丁表	十行
一丁裏	十行	二丁表	十行
二丁裏	十行	三丁表	十行
三丁裏	十行	四丁表	十行
四丁裏	十行	五丁表	十行
五丁裏	十行	六丁表	十行
六丁裏	十行	七丁表	十行
七丁裏	十行	八丁表	十行
八丁裏	十行	九丁表	十行
九丁裏	十一行	十丁表	十一行
十丁裏	十一行	十一丁表	十一行
十一丁裏	十行	十二丁表	十行
十二丁裏	十行	十三丁表	十行
十三丁裏	十行	十四丁表	十行
十四丁裏	十行	十五丁表	十行
十五丁裏	十行	十六丁表	十行
十六丁裏	十行	十七丁表	十行
十七丁裏	十行	十八丁表	十行
十八丁裏	十一行	十九丁表	十一行
十九丁裏	十行	二十丁表	十行
二十丁裏	十一行	二十一丁表	十一行

二十二丁裏 十行 … 二十二丁表 十行
 二十二丁裏 十一行 … 二十三丁表 十一行
 二十三丁裏 十行 … 二十四丁表 十行
 二十四丁裏 十一行 … 二十五丁表 十一行
 二十五丁裏 十一行 … 二十六丁表 十二行
 二十六丁裏 十行 … 二十七丁表 十行
 二十七丁裏 十行 … 二十八丁表 十行
 二十八丁裏 十行 … 二十九丁表 十行
 二十九丁裏 十行 … 三十丁表 十行
 三十丁裏 十行 … 三十一丁表 十行
 三十一丁裏 十行 … 三十二丁表 十行
 三十二丁裏 十行 … 三十三丁表 十行
 三十三丁裏 十行 … 三十四丁表 十行
 三十四丁裏 十行 … 三十五丁表 十行
 三十五丁裏 十行 … 三十六丁表 十行
 三十六丁裏 三行

議会図書館本全体を、見開き単位で行数を検してみると、右枚と左枚とで行数が異なる箇所は、次の十一例のみである。

帯木 一丁裏(十行) 〽二丁表(九行)
 帯木 十六丁裏(八行) 〽十七丁表(九行)
 玉蔓 二十四丁裏(十一行) 〽二十五丁表(十行)
 蛩 十一丁裏(十行) 〽十二丁表(十一行)

常夏 十三丁裏(十一行) 〽十四丁表(十行)
 若菜下 一丁裏(八行) 〽二丁表(九行)
 柏木 十二丁裏(十行) 〽十三丁表(十一行)
 横笛 十丁裏(十行) 〽十一丁表(十二行)
 横笛 十一丁裏(十二行) 〽十二丁表(十一行)
 手習 八丁裏(九行) 〽九丁表(十行)
 手習 二十四丁裏(十一行) 〽二十五丁表(十行)

議会図書館本全体から見ればこれらは例外である。議会図書館本の書写においては、見開きを一つの単位として、行数変更による書写調整を行っているのである。

五 特殊表記和歌

議会図書館本の表記の特徴として、特殊表記和歌が挙げられる。一行で続けて書かず、割注のような二行書を交えた表記方法を用いている。ここでは便宜的に特殊表記和歌と呼称する。

蜻蛉 十一丁裏

しのひねや きみも かひもなき しての ころ たをさ、 なくらん かよは、

表1から、特殊表記和歌が見られる巻は、須磨、明石、濔標、朝顔、玉蔓、胡蝶、蛩、野分、行幸、竹河、椎本、浮舟、蜻蛉の十三巻で、和歌の総数は六十二首である。特殊表記和歌の全用例の写真

と翻字は、神田久義・豊島秀範(二〇一二)に収録されている。

また、特殊表記和歌に関する考察には、豊島秀範(二〇一〇a)、神田久義(二〇一一)がある。豊島秀範(二〇一〇a)では、特殊表記和歌は「巻の内容に応じて、詠者や、歌の数などを、全体のバランスを配慮して採用している」と述べ、書写者が意図を持って特殊表記を用いていると推測する。一方、神田久義(二〇一一)では、改頁する直前の和歌を議会図書館本のような特殊表記にする事例が冷泉家時雨亭文庫蔵『秋風和歌集』にあることを指摘し、頁の最終行に特殊表記で和歌を記載した祖本から書承を重ねる過程で行数が変わり、特殊表記の本来の意味が失われた段階の議会図書館本に至ったと推定している。ここでは両論の概要を紹介するにとどめる。

六 仮名表記

議会図書館本は、他の『源氏物語』写本と同様に、仮名と漢字によって書かれている。以下では、ハの仮名、シの仮名、行頭の同音仮名の変字について、これまでの調査結果を述べる。

六-1 ハの仮名

ハの仮名の異体仮名としては、〈者〉〈八〉〈盤〉〈は〉の四種が使用される。

- 漢字「者」を字母とする〈者〉

し

- 漢字「八」を字母とする〈八〉

は

- 漢字「盤」を字母とする〈盤〉

- 漢字「波」を字母とする〈は〉

は

〈者〉と〈八〉〈盤〉〈は〉の間には使用状況の違いが見られる。斎藤達哉(二〇一二a)では、若紫、花散里、関屋、初音、篝火、行幸、藤袴を調査した(図5)。(者)と(八)〈盤〉〈は〉の使用状況の傾向は、次のようにまとめられる。

○仮名〈者〉

- (一) / ϕa /、/wa/、/ba/の表記に用いられる。
- (二) / ϕa /は自立語語頭にしか用いられないので、自立語語頭はほとんど〈者〉で表記される。
- (三) 連濁による/ba/には、専ら〈者〉が用いられている。

○仮名〈八〉〈盤〉〈は〉

- (一) 〈八〉〈盤〉〈は〉は、/wa/、/ba/の表記に用いられるが、/ ϕa /の表記には用いられることは稀である。
- (二) 〈八〉〈盤〉〈は〉は、自立語語頭ではほとんど用いられない。
- (三) 助詞中の/ba/ (接続助詞バ、終助詞バヤ) は、〈盤〉〈は〉によって表記される。

議会図書館本では、/ ϕa /の表記に〈者〉が固定する傾向が見られる。

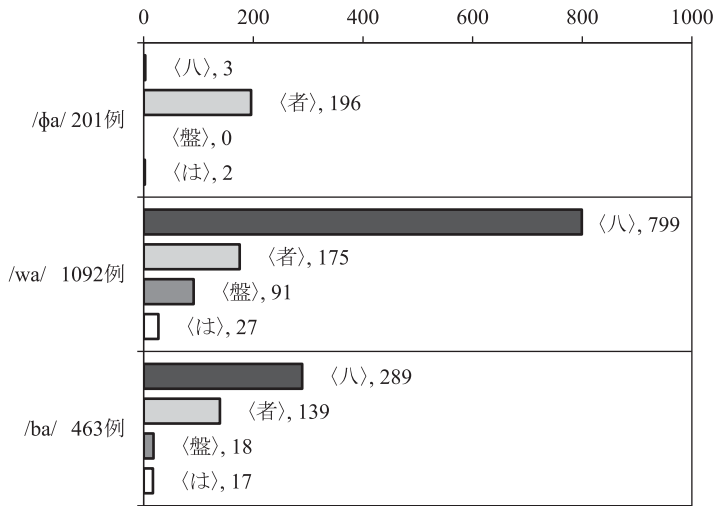


図5 音韻別に見たハの異体仮名数

ただし、〈者〉と〈八〉〈盤〉〈は〉との間に排他的な関係はなく、音韻による完全な書き分け（異体仮名の使い分け）が存在するとは言えない。/ɸa/には〈者〉しか用いられないが、/wa/、/ba/には〈者〉も〈八〉〈盤〉〈は〉も共通して用いられているからである。

<し>	<志>	単位		計
		先頭	非先頭	
0	14	0	0	14
4	1	4	0	5
18	1	18	0	19
24	0	24	0	24
12	0	12	0	12
10	0	10	0	10
6	0	6	0	6
74 (82.2%)	16 (17.8%)	74	16	90
				90 (100%)

表2 花散里における異体仮名〈し〉〈志〉の使用位置と用例数

がそれぞれ、各単位の先頭に用いられるか、非先頭に用いられるかという使用位置別の用例数を示した。

表2では、語の単位を極力短くとり、複合語は認めず、語幹と活用語尾も分け、字音語は漢字一字を一単位とした上で、〈志〉〈し〉よその傾向が見られる。

さて、〈志〉は、中世以降に語頭で用いられるとされており、議会図書館本の〈志〉も例外ではない。花散里を調査すると、意味単位の先頭では〈志〉を用い、非先頭では〈し〉を用いるというおおよその傾向が見られる。

六二 シの仮名

議会図書館本では、シの仮名として、〈し〉と〈志〉とが用いられる（実際の字形は表4を参照のこと）。例えば、花散里の場合、〈し〉は八二・二％、〈志〉が一七・八％である。六十八種の写本・古活字本・板本を調査した範囲では、〈志〉の割合が最も少ないのは、蓬左文庫蔵河内本（尾州家本）の二・一％、最も多いのは、鶴舞図書館本〔89-244-1〕の二四・二％であって、議会図書館本は、多い方から数えて八番目である。

字音語の先頭と形容詞活用語尾の先頭では、〈志〉〈し〉の双方が使用される。一方、自立語の先頭では、〈志〉だけが使用され、〈し〉は使用されない。この特徴を併せ持つ本は、管見に入った限りでは、大正大学図書館蔵本（室町後期写）、熊本大学北岡文庫蔵本〔37-赤-204〕（江戸前期・元禄七年写、伝北村季吟筆の奥書）の二写本がある。

また、比較の条件を緩めて、〈志〉の使用位置だけが同じ本を求めてみると、右の二本に次の八本が加わることになるが、室町中期を遡る伝本は見られない。

- 東京大学附属総合図書館青洲文庫本〔E23-48〕（室町中期写）
- 肖拍本 天理大学附属図書館蔵〔913.36-イ〕（室町後期写）
- 高松宮本 国立歴史民俗博物館蔵（室町後期、長享年間の奥書）
- 阿里莫本 天理大学附属図書館蔵〔913.36-イ337〕（江戸前期、元禄五年の奥書）
- 筑波大学本〔ル-120-47〕（江戸中期写）
- 熊本大学北岡文庫本〔102-1〕（書写年代不詳）
- 中京大学附属図書館本〔貴-9〕（書写年代不詳）
- 九州大学蔵古活字本（無刊記本）

次に、自立語の先頭に〈志〉を用い、〈し〉は用いないという点に注目したい。図6には、花散里の六十八種の写本・古活字本・板本の中から、〈志〉を自立語の先頭に使用しない本（●印）、〈志〉を自立語の先頭に使用する本（○印）、〈し〉を自立語の先頭に使用

しない本（◆印）、〈し〉を自立語の先頭に使用する本（◇印）を、それぞれシの仮名における〈志〉の含有率順にプロットしたものである（横軸の％は〈志〉の含有率）。

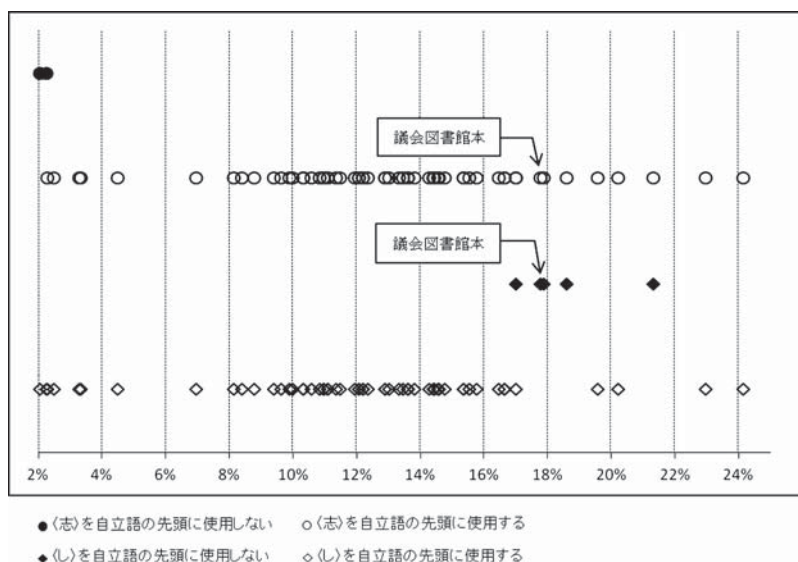


図6 自立語先頭での〈志〉〈し〉の使用と〈志〉の含有率

自立語の先頭に〈志〉を用い、〈し〉は用いないという条件を併せ持つ本は、大正大学図書館蔵本（室町後期写）、熊本大学北岡文庫蔵本（江戸前期写）に次の四本が加わるが、こうした本は、諸本の中では〈志〉の含有率が高め（一七・二～二一・四％）であることが分かる。

- 国立国会図書館蔵古活字本（室町～江戸初期写）
- 宮内庁書陵部蔵青表紙本〔伏 204〕（室町末期写、伝三条西実隆筆）
- 鹿児島大学蔵玉里文庫本〔天 217・137〕（室町末期写）
- 宮内庁書陵部蔵河内本〔3518-154-27〕（江戸中期写）

以上から、議会図書館本のシの仮名の使用状況は、〈志〉の使用率が高い本での文字遣いの一つを伝承するものであり、その文字遣いは室町期から江戸期にかけてのものと考えられる。

六二 行頭の同音仮名の変字

議会図書館本では、行頭に同音仮名が並ぶ場合に、同字形を避ける傾向が顕著である。これは、目移りによって同一行を二度読むことを避ける工夫であると考えられる。桐壺、花散里、若紫、須磨、絵合、柏木、浮舟を調査し、行頭に同音仮名が並ぶ全九十七組について整理したものが、表3である（実際の字形についても、表4に示した）。

変字には、字母の異なる仮名を用いる場合（A）、同字母であつ

ても異なる字形を用いる場合（B、C）、がある。また、漢字【見】と仮名〈み〉が前後に並ぶ場合（D）も変字の一つと考えられる。ただし、少数ながら、〈い〉〈こ〉〈とa〉〈なb〉〈ま〉には同字形が並ぶ場合（E）があり、〈か〉〈よ〉には次の字への連綿の有無による違い（F）も見られる。

本文と和歌の書き出しが行頭に並ぶ場合（G）は、変字が行われる場合もあり、行われない場合もある。議会図書館本の和歌は、字下げを行って書かれているため、目移りによる誤読の蓋然性が低いからであろう。

以上の調査は、五十四巻全体にわたるものではないので、今後、調査範囲を全巻に広げて検討する必要がある。





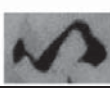


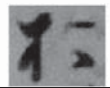


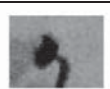











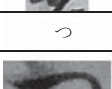


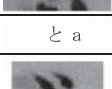
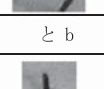
表3 隣接する行頭における同音の仮名


















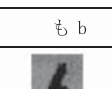



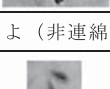
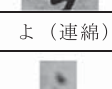
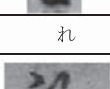
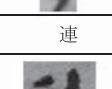
	A	B	C	D	E	F	G
	異字母	同字母 異字形	同字母 類似字形	漢字か 仮名か	同字母 同字形	連綿の有無	本文か 和歌か
ア	あ阿(6)						
イ	い伊(2)	い以(2)			いい(3)		
オ	おa於(4) おb於(5)		おaおb(1)				
カ	か可a(10) か可b(7)					かか(1)	
ケ	ヶ希(1)						
コ	こ古(1)				ここ(1)		
サ							ささ(1)
シ	し志(4)						
タ	多a堂(4)		多a多b(1)				多a堂(1)
ツ	つ徒(1) つ津(1)						
ト			とaとb(3)		とaとa(1)		
ナ			なbなa(15)		なbなb(1)		なaなb(1)
ニ	耳a(1)						
ノ		乃の(2)					
ハ	者は(1) 盤は(1)						
マ	ま万(1) ま満(1)				まま(1)		
ミ	み見(2)			【見】み(1)			みみ(1)
ム							むむ(1)
モ		もa毛(1) もb毛(1)					
ヤ	や屋(2)						
ヨ						よよ(1)	
レ	れ連(1)						

(備考) 表中の括弧内の数字は用例数。

【見】は漢字としての使用例。

表4 仮名の字体・字形一覧(抜粋)

ア	あ	阿	
			
イ	い	伊	以
			
オ	お a	お b	於
			
カ	か	可 a	可 b
			
ケ	ヶ	希	
			
コ	こ	古	
			
サ	さ (非連続)	さ (連続)	
			
シ	し	志	
			
タ	多 a	多 b	堂
			
ツ	つ	徒	津
			
ト	と a	と b	
			

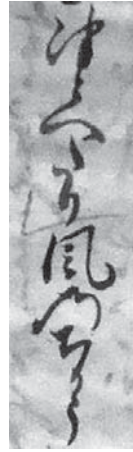
ナ	な a	な b	
			
ニ	耳	尔 a	
			
ノ	乃	の	
			
ハ	は	者	盤
			
マ	ま	万	満
			
ミ	み	見	参考 漢字 【見】
			
ム	む		
			
モ	も a	も b	毛
			
ヤ	や	屋	
			
ヨ	よ (非連続)	よ (連続)	
			
レ	れ	連	
			

七 書入

議会図書館本には、墨筆、朱筆、鉛筆による書入がある。書入の全用例は、神田久義・斎藤達哉・小木曾智信・高田智和（二〇一三）に収録されている。

鉛筆による書入は近代以降のもので、賢木、蓬生、少女、玉鬢の四巻にそれぞれ一例ずつである。いずれも鉤記号を用いて、何らかの区切りを示している。

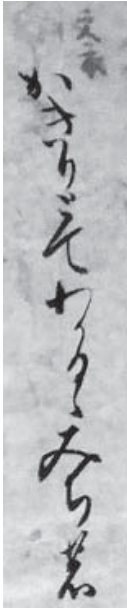
少女 十二丁裏



「つとへたり」と「風のちかう」の間に鉤記号

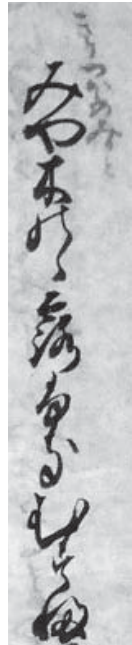
朱筆による書入は桐壺に二例だけ見られる。二例とも和歌の詠者を注している。

桐壺 五丁裏



「かきりとてわかる、みちのかなしきにかまほしきはいのちなりけり」に「更衣」

桐壺 九丁裏



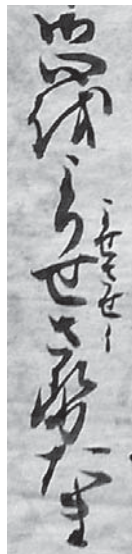
「みや木の、露ふきむすふ風のをとにこはきかもとおもひこそやれ」に「きりつほのみかと」

墨筆による書入が最も多く、帚木（十二例）、空蟬（四例）、夕顔（五例）、若紫（三例）、末摘花（二例）、紅葉賀（二例）、須磨（十一例）、明石（二例）、濔標（一例）、薄雲（二例）、朝顔（一例）、少女（一例）、玉鬢（三例）、初音（一例）、藤袴（一例）、若菜上（二十八例）、若菜下（五例）、柏木（四例）、鈴虫（三例）、夕霧（三例）、御法（三例）、幻（二例）、紅梅（二例）、竹河（六例）、椎本（三例）、総角（八例）、宿木（八例）、東屋（二例）、浮舟（四例）、蜻蛉（三例）と、三十巻にわたって百三十二例である。

墨筆による書入には、異本注記、平仮名表記に漢字表記を注するもの、本文訂正、片仮名による読み仮名、濁音符などがある。

○異本注記の例

若紫 六丁裏



「よりせさせ」に「よせさせい」

○平仮名表記に漢字表記を注するものの例

若紫 十八丁裏



「おえ」に「オ」

○本文訂正(補入)

御法 一丁裏



「すみかにこりぬへく」を「すみかにこもりぬへく」に

○本文訂正(見消)

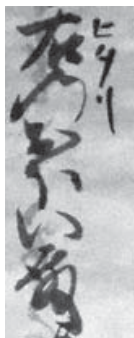
椎本 三丁表



「ふたわたり」を「ふなわたり」に

○片仮名による読み仮名

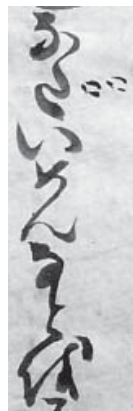
総角 四十七丁裏



「左」に「ヒタリ」

○濁音符

御法 四丁裏



「なたいめん」の「た」に圈点

墨筆による書入は、筆跡から二筆と見られる。異本注記や平仮名表記に漢字表記を注するものが一筆、本文訂正、片仮名による読み仮名、濁音符がもう一筆と思われる。

朱筆と墨筆とを合わせても、書人の数は百三十四例にすぎない。書人のない巻もあり、議会図書館本の書人は、総じて疎らである。議会図書館本は、高度な学習本として享受されてきたものではないと断じ得る。

書人以外にも、議会図書館本には享受者の痕跡を見出すことができる。葵には薄紅色の不審紙がある。鈴虫と御法には、上欄に和紙を剥がした跡がある。かつては付箋があつたのであろう。不審紙や付箋の跡について、議会図書館本全巻にわたって詳細な確認は成し得ていない。他日の調査を期したい。

八 巻名

前に、議会図書館本には、外題のほかに、見返裏に仮題僉があること述べた。外題と対照させて巻名を示すと次のようになる。便宜的に一段目に通行の漢字表記による巻名を示し、二段目には外題による巻名、三段目には仮題僉による巻名を記す。

桐壺	きりつほ	きりつほ	末摘花	すゑつむ花	すゑつむ花	わかむらさきのならひ
帚木	は、き木	は、き、	紅葉賀	もみちの賀	もみちのか	
空蟬	うつせみ	うつせみ	花宴	花のえん	花のえん	
夕顔	ゆふかほ	ゆふかほ	賢木	さか木	さかき	
若紫	わかむらさき	わかむらさき	花散里	花ちるさと	花ちるさと	
			須磨	すま	すま	
			明石	あかし	あかし	
			落標	みをつくし	みをつくし	
			蓬生	よもきふ	よもきふ	
			関屋	せき屋	せきや	
			絵合	ゑあはせ	ゑあはせ	
			松風	松かせ	まつかせ	
			薄雲	うす雲	うすくも	
			朝顔	あさかほ	あさかほ	
			少女	をとめ	をとめ	
			玉鬘	玉かつら	たまかつら	
			初音	はつね	はつね	
			胡蝶	こてふ	こてふ	
			蛸	ほたる	ほたる	
			常夏	とこなつ	とこなつ	
			篝火	か、り火	か、りひ	
			野分	野わき	のわき	
			行幸	みゆき	みゆき	

藤袴	ふちはかま	ふちはかま	玉かつらのならひ八
真木柱	真木はしら	まきはしら	玉かつらのならひ九
梅枝	むめかえ	むめかえ	
藤裏葉	藤のうら葉	ふちのうらは	
若菜上	わか菜上	わかな上	
若菜下	わか菜下	わかな下	
柏木	かしは木	かしはき	
横笛	よこ笛	よこふえ	
鈴虫	すゝむし	すゝむし	よこふえのならひ
夕霧	ゆふきり	ゆふきり	
御法	みのり	みのり	
幻	まほろし	まほろし	
匂宮	にほふ宮	にほふひやうふけやう	
紅梅	こうはい	こうはい	
竹河	たけ河	たけかは	
橋姫	はしひめ	はしひめ	
椎本	しむかもと	しむかもと	
総角	あけまき	あけまき	
早蕨	さわらひ	さわらひ	
宿木	やとりき	やとりき	
東屋	あつま屋	あつまや	
浮舟	うきふね	うきふね	
蜻蛉	かけろふ	かけろふ	
手習	手ならひ	てならひ	

夢浮橋 夢のうき橋 ゆめのうきはし

漢字／仮名などの表記の違いを除いて、外題と仮題僉とで巻名が異なっているのは、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋、初音、胡蝶、蛩、常夏、篝火、野分、行幸、藤袴、真木柱、鈴虫、匂宮の十六巻である。匂宮の仮題僉では、異名の「にほふひやうふけやう（匂宮部卿）」が記載されている。そのほかの十五巻では、「うつせみ は、き、のならひ一」「ゆふかほ は、き、のならひ二」のように、巻名に並びの巻であることが記されている。

源氏物語には並びの巻が知られている。池田亀鑑（一九六〇）に整理された並びは次のとおりである。

- 二、ハハキギ 二ノナラビ、ウツセミ、ユフガホ
- 三、ワカムラサキ 三ノナラビ、スエツムハナ
- 十一、ミラツクシ 十一ノナラビ、ヨモギフ、セキヤ
- 十七、タマカツラ 十七ノナラビ、ハツネ、コテフ、ホタル、トコナツ、カガリビ、ノワキ、ミユキ、フヂバカマ、マキハ
- シラ
- 二十二、ヨコブエ 二十二ノナラビ、スズムシ
- 二十七、ニホフ兵部卿 二十七ノナラビ、コウバイ、タケガハ

仮題僉の並びの立て方は、紅梅と竹河を匂宮の並びとしていない点を除くと、既知のものと一致している。

議会図書館本の見返裏の仮題僉は、改装時のものと推定されるた

め、仮題僉の巻名は、可能性として、改装前の巻名が写し取られている場合と、改装者が何かに依って巻名をつけた場合とが考えられる。いずれにせよ、中世に遡る巻名を仮題僉に持つことは、議会図書館本の特徴の一つである。

八 本文系統

源氏物語の諸本には大小の異文が見られ、池田亀鑑編『源氏物語大成』の校異篇では、これを青表紙本、河内本、別本の三系統に分類している。議会図書館本の本文系統については、河内本特有の本文が目立たないこと、青表紙本であることを示す形態（池田亀鑑が青表紙本一般の形態として掲げた、和歌の二字下げと地の文への移行や、帖末の勘物など）が見られないため、従来の見方によって、別本として見ておくのが穏当であろう。議会図書館本については、これまでに伊藤鉄也、豊島秀範、斎藤達哉の調査では、調査対象の巻の違いや、着眼点の違いによって、別本、河内本、青表紙本の三様に位置づけられ、結論を見ない。源氏物語本文研究者による多角的な検討が、今後期待される場所であるが、現状として、それぞれの論の一端を提示しておきたい。

まず、伊藤鉄也（二〇一一）では、「今後さまざまな分野から検討が加えられるはずである。今は、伊藤の分類試案〈乙類〉とする。従来の〈別本群〉に近いものである」と、一回目の調査時に行った「初音」での校合結果をもとに、本文系統の見通しを述べている。

次に、豊島秀範（二〇一〇b）では、「柏木」での主要十一本の対校によって、「未確認の議会図書館本は、保坂本の本文の近似し

ていること。国宝源氏物語絵巻詞書の本文もそれらに類似するところが多い。そして、それらの本文は、いわゆる河内本系の本文に近い」と述べている。

また、「花散里」の伝本六十八種を調査した斎藤達哉（二〇一二b）では、本文の有無（異文）を整理した結果、I～IVの四つのグループに分けた（表5）。表5の○印は下線部の本文を有することを意味し、×印はその本文がないことを意味している。I・II・III・IVは、グループ相互を弁別するための便宜的な呼称であり、成立等の順序を意味するものではない（グループごとの所属本は斎藤達哉（二〇一二b）を参照）。本文グループIは、いわゆる河内本系統である。グループIIIには板本が多く含まれており、このグループの写本はいずれかの板本を写した可能性も考えられる。グループIVに属する本は最も多い（六十八本中三十八本）。例えば、定家本、明融本、大島本、書陵部青表紙本、日大三条西家本、穂久邇本、陽明文庫本、保坂本などもグループIVに分類される。議会図書館本もグループIVに含まれ、青表紙本にも別本にも共通する点が見られる。

表5 花散里における異文の有無と本文グループ

	本	文	源氏物語大成における相当箇所	I	II	III	IV
A	コトハリヲオ(モ)ホセハスキカテ (二)ナルヘシ		三八八頁⑪	○	○	×	×
B	カクレサセタマテノチハ イトトモノアハレ		三八七頁④				
C	ヨウイアリ(テ)アクマテアテヤカニラ ウタケナリ		三八九頁⑤	○			
D	ココロクルシキカタニハオホエコトニト キメキタマヒシモノヲナト		三八九頁⑥		×	×	
E	オモヒナシタマヒ(フ)ツツサルニツケ テモノクカラズ		三九〇頁⑫				
F	イトマナクトシツキヲヘテモクルシケナ リナラ		三八八頁⑬	×	×	○	×

九 おわりに

以上、議会図書館本の書誌と表記の特徴について述べた。書入、巻名、本文系統などは、今後の課題としてさらに検討を要する事柄である。

また、新出資料である議会図書館本を学界に紹介するため、二〇一〇年一月の一回目の原本調査以降、議会図書館本の翻訳を進めてきた。二〇一二年一二月に全巻翻訳を終了し、国立国語研究所サイトから電子化テキストを公開している(米国議会図書館蔵『源

氏物語』翻字本文、<http://www.ninjal.ac.jp/LCgenji/>)。また、原本の撮影画像は、桐壺、須磨、柏木の三巻を米国議会図書館アジア部が公開している(<http://cweb4.loc.gov/service/asian/asian0001/2012/2012.html/2012200842776800toc.html>)。この公開画像を利用して、原本画像と翻字本文との対照表示ビューアーを制作し、国立国語研究所サイトから試験公開中である(米国議会図書館蔵『源氏物語』画像(桐壺、須磨、柏木) 'http://www2.ninjal.ac.jp/legenji_image/)。

最後に、議会図書館本の原本調査及び原本画像の公開にあたり、米国議会図書館アジア部日本課の伊東英一氏、中原まり氏、PIPHERR・Y・清代氏に格別の御高配を賜ったことを記し、篤く感謝の意を表すものである。

*本研究は、人間文化研究連携共同推進事業「海外に移出した仮名写本の緊急調査(平成二十二年、代表者:高田智和)」、「海外に移出した仮名写本の緊急調査(第二期)(平成二十三〜二十四年度、代表者:高田智和)」の研究成果である。

参考文献

- 橋口侯之介(二〇〇五)『和本入門—千年生きる書物の世界—』東京:平凡社。
橋口侯之介(二〇一一)『和本への招待—日本人と書物の歴史—』東京:角川学芸出版。
堀川貴司(二〇一一)『書誌学入門—古典籍を見る・知る・読む—』東京:勉誠出版。
池田亀鑑(一九六〇)「三、巻名と巻序」「四、並びの巻について」池田亀鑑(編)『源氏物語事典』七九。東京:東京堂出版。
伊藤鉄也(二〇一一)「米国議会図書館アジア部日本課蔵『源氏物語』の調査概要」斎藤達哉・高田智和(編)『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻刻—桐壺・藤裏葉—』一五。東京:国立国語研究所。

- 神田久義 (二〇一一) 「米国議会図書館本『源氏物語』の書写形態に関する一試論」豊島秀範 (編) 『源氏物語本文の研究』一八〇–一九九。東京・國學院大學文学部日本文学科。
- 神田久義・豊島秀範 (二〇一二) 「米国議会図書館蔵『源氏物語』特殊表記による和歌一覧」斎藤達哉・豊島秀範・伊藤鉄也・小木曾智信・高田智和 (編) 『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文―若菜上―幻―』一七九–一九二。東京・国立国語研究所。
- 神田久義・斎藤達哉・小木曾智信・高田智和 (二〇一三) 「米国議会図書館蔵『源氏物語』書入一覧」高田智和・斎藤達哉・小木曾智信・伊藤鉄也・豊島秀範 (編) 『米国議会図書館蔵『源氏物語』翻字本文―匂宮―夢浮橋―』二八七–三〇三。東京・国立国語研究所。
- 斎藤達哉 (二〇一二a) 「米国議会図書館蔵源氏物語写本における『ハの仮名』―異体仮名【八】者【盤】【は】の試験的調査」『日本古籍における【表情報報学】の基盤構築に関する研究Ⅰ』三六–四九。東京・国文学研究資料館。
- 斎藤達哉 (二〇一二b) 「仮名文の文字調査―源氏物語花散里六八本の仮名字母と漢字―」『専修国文』九一–一四六。
- 豊島秀範 (二〇一〇a) 「アメリカ議会図書館本の和歌表記の特徴―和歌の一行散らし書きを中心に―」『國學院大學大学院平安文学研究』二・八八–九六。
- 豊島秀範 (二〇一〇b) 「柏木」巻主要十一本対校の特徴―巻別稿本の具休例に即して―」豊島秀範 (編) 『源氏物語本文の再検討と新提言3』一九七–二八八。東京・國學院大學文学部日本文学科。

On *The Tale of Genji* Manuscript Book Owned by the Library of Congress

TAKADA Tomokazu^a SAITO Tatsuya^b

^aDepartment of Linguistic Theory and Structure, NINJAL

^bSenshu University

Abstract

The Tale of Genji (54 volumes in total, LC Control No.: 2008427768) owned by the Library of Congress in the United States was an unknown manuscript copy until the Library of Congress obtained it in 2008. In this paper, we describe the bibliographic and notational features of this manuscript:

1. Itsutsuji Moronaka (五辻諸仲, 1487–1540) is thought to be the copyist.
2. The cover is not original but a later rebinding done before the 17th century.
3. This manuscript has tags recording the old volume name *Narabino Maki* (並びの巻).
4. The number of lines in each volume is not fixed, but the number of lines on right and left facing pages is always equal.
5. 62 poems are written in double lines.
6. Different kana variants for *ha* and *si* were used to indicate pronunciation or lexical category.
7. There are a few reading marks and glosses.

Key words: *The Tale of Genji*, Library of Congress, manuscript, bibliography, kana variant